

類人学

山極寿一

京都大学大学院
理学研究科教授

◎ニホンザルの研究から始められたそうですが、その後、ゴリラに移られたのはなぜですか？

山極●ゴリラ、チンパンジー、オランウータンなど類人猿に分類される種は、ニホンザルやリスザルなどのサルとは区別されています。その理由は、類人猿とサルのDNAの違いよりも、類人猿と人間のDNAの違いのほうが、うんと小さいからです。つまり、類人猿はサルよりもはるかに人間に近い。だから類人猿はヒト科に分類されていますし、われわれ研究者は「類人」と呼ぶ。なぜ類人であるゴリラに惹かれたかといえば、類人は人間の隣人であり、類人を知ることが、人間の進化の謎を解くことにつながる考えたから。つまり類人を通して、人間を知りたいのです。

現在は、中部アフリカのガボンで、野生のゴリラとチンパンジーの共存を中心に研究しています。ガボンは国土の85%が森林地帯で、生物多様性に富む国です。そこではゴリラとチンパンジーが同じ地域に共存しているのですが、実はこれまで調査地域の関係で、ゴリラとチンパンジーがどのようにして共存しているかが知られていなかった。これは画期的なことなのです。

ゴリラとチンパンジーは食べ物の好みがとて

類人の研究から、人間の進化の謎や共存の知恵を探る

も似ていて、どちらも甘い果実が大好きなのです。本来、好みの食物が同じである近縁種は同じニッチ（生態系の中で占める位置）では共存できないという「競争排除則」があるのですが、なぜ、彼らは共存できるのか——。それは、食べ方や集まり方が違うから。ゴリラはいつも集団で食べますが、場所にはこだわらずに、転々と居場所を変える。一方、チンパンジーも集団を形成しますが、それぞれの個体が自分の気に入った場所に移動して食べるので、1回に食べる量が少ない。だから直接的な競合が避けられ、互いが出会うこともほとんどないのです。まれに出会っても、それぞれ無視してうまくやっています。

◎◎通常、チンパンジーは樹の上で、ゴリラは地面にいて、ということも関係しているのですか？

山極●実は多くのゴリラが、果実に近い樹の上で暮らしているんですよ。しかも、ゴリラとチンパンジーは、サルに比べると消化能力が弱く、完熟した果実しか食べられない。つまり好む食

物が限られているにもかかわらず、排除し合わずに共存を果たしてきたということになります。

現在、地球上の人類はホモ・サピエンス1種ですが、かつてはホモ・ハビリスとアウストラロピテクス、ホモ・ネアンデルタールensisとホモ・サピエンスといった近縁種が複数共存していた時期があります。共存を調べることがなぜ重要かというと、類人の共存の研究が、われわれの祖先になぜ共存が可能だったのか、そしてまた、人類はなぜ1種になったのかといった進化のプロセスを知る手がかりとなるからです。さらに現在、人間はホモ・サピエンス1種とはいえ、文化や風習、宗教が違う民族がいかにして共存するかが大きな課題になっています。生態的ニッチと同じように文化的ニッチにどう共存するかが重要です。類人の共存を知ることが、他民族・多文化の共生を考える糸口になるのではないかと考えています。

◎◎類人も人間も、もとは同じ祖先に行き着くわけですが、進化の過程で種が分かれていっ

た原因はどこにあるのでしょうか？

山極●最大の原因は気候変動です。人類発祥の地はアフリカですが、アフリカの熱帯雨林は気候変動の影響を大きく受けています。寒冷化・乾燥化により森が縮小・分断されて、一部の生物は草原サバンナへ出て適応するようになった。サバンナに出たのが人間の祖先。チンパンジーはサバンナと森の境界に棲み、ゴリラは森にとどまり、一部は山の上に進出した。なぜゴリラだけが山の上に進出できたかといえば、ゴリラはほかのサルが食べられないようなトゲのあるイラクサやアザミなどの植物を、手と口で器用に折りたたんで食べることができるからです。一方、人類はサバンナに進出することで、ゴリラやチンパンジーにはない生活様式や社会様式を手に入れることになったのです。

しかしだからといって、人間がゴリラやチンパンジーより優れているかという点、そうでもない。むしろ劣っていると感じることが多いですね。たとえば、平和主義で知られるボノボ。彼らはオス・メスにかかわらず性的な行動を頻繁にとるのですが、これは挨拶や緊張緩和といったコミュニケーションの意味合いがあり、暴力をふるうこともないし、激しい争いも起こらない。

もちろん人間がボノボのようになることはできないけれど、平和に関してはボノボのほうが先を行っていると言えます。

あるいはゴリラは戦いを鎮める方法に長けている。2頭のゴリラが戦っていると、力の弱い第三者が仲介に入って戦いを収めるのです。力の



対決しようとしているゴリラに、弱いゴリラが顔を近づけじっと見つめ、なだめている。

弱い者が介入することで、両者は面子を立てることができ、自らの意思で予先を収めることができる。力ではなくルールで戦いを収めるという、非常に対等性を重んじる社会を築いています。敗者をつくらず、弱者が介入し続けることで、社会のバランスを保つ。これはとても時間がかかるし、難しいことですよね。でも、そうすることで対等な社会を築いているのです。

一方で、サルは力の強い者を勝者にして、敗者を抑制させる社会をつくる。争いを解決するにはこのほうが簡単です。人間も放っておけば、勝者・敗者を生み出す安易な方法を選択してしまうでしょう。現に今はそうなっている

ような気がします。その傾向に歯止めをかけるために、人間がゴリラの社会から学ぶことは大いにあると思います。すぐに勝者・敗者を決するような短絡的な方法ではなく、長期にわたった解決策を見いだしていく必要があるのではないかと思います。もともと人間社会はゴリラの社会よりも複雑ですから、仲裁がどういう形で入ればいいのか、じっくり考えていく必要はあります。

ヒントになるのは、勝者・敗者をつくらない社会というのは、小さなコミュニティで、皆が顔見知りであるということ。人数に限りがある共同体だから、うまくバランスを保つことが可能なのでしょう。

◎◎ゴリラはどうやって仲裁に入るのですか？

山極●戦っている両者の間に割り込み、双方にわかるがわる顔を近づけていつて、目をじっと見つめるのです。サルの場合は、相手の目を見るのは威嚇になりますが、ゴリラの場合は親和的な意味もあります。20cmくらいのところまで

顔を近づけて20秒以上じっと見つめるのですが、これは相手と一体になって気持ちを操作したい、相手を意のままにしたい、というときの行為だと思っています。人間が親子や恋人の間で見つめ合うのに似ています。言葉のいらないコミュニケーションであり、戦いを鎮めたり、遊びや交尾に誘ったり、挨拶をしたり、食物が欲しいというときのしぐさなんです。ゴリラの社会では、視線にそれくらい強いメッセージが込められています。

◎◎サルと類人、そして人間では、似ている部分もあるけれど、やはり社会やコミュニケーションはずいぶん違うのですね。

山極●人間は重層化した社会に生き、日々さまざまな集団を遍歴して暮らしています。朝起きて、家族という集団から、学校という集団や、会社という集団へ移動しますね。類人が所属する集団は家族だけ。集団内部で共存のためのお互いの合意形成がなされている。ゴリラやチンパンジーはいったん家族を離れてしまつたら、同じ家族に戻ることはまずありません。類人も人間も生きるためには食と性が必要ですが、その集団でのあり方が実は両者で正反対なのです。類人は家族としか一緒に食べ

ず、性はオープンですが、人間は家族以外の仲間と食べるし、性は隠された行為です。そうすることで人間は、家族以外の仲間と共感できるような地域社会をつくったのです。そこに類人と人間の大きな違いがある。そんな不思議な社会性がどうして進化したのか、類人と人間の生活史を比べてみるとよくわかります。

たとえば、現在、問題になっている少子高齢化も、もとをたどれば、人間の祖先が寒冷期に安全な森林を出て危険な草原へ進出し、高まった幼児死亡率への対策として多産になったことに原因があります。4～9年に1度しか出産しない類人に比べて人間はとても多産なのです。にもかかわらず、幼児は成長にとっても時間がかかり、たくさんのお子を集団で育てるためにできたのが家族と地域社会です。育児を担ったのは高齢者だったのです。人間はもともと多子高齢化の社会を志向してきたわけで、それが少子になったことで、社会のバランスが崩れた。ではどうすればいいのかということが、もともと少子の類人を研究することで見えてくる。人間が抱える現在のさまざまな問題の解決の糸口は、類人研究の中にまだまだたくさんあるはずです。

やまぎわ・じゅいち……1975年、京都大学理学部卒業。日本モンキーセンターリサーチフェロー、京都大学霊長類研究所助手を経て、現在、京都大学大学院理学研究科教授。霊長類、特に野生のゴリラやチンパンジーの生態や社会の研究を通して、人間のコミュニケーションや社会の起源などを考察。著書に、『ゴリラ』（東京大学出版会）、『暴力はどこからきたか——人間性の起源を探る』（NHKブックス）、『人類進化論——霊長類学からの展開』（裳華房）など多数。

